

息抜き短編「サイコマジック」

ざわ公

静寂が包む、風の凪いだ夜。
建設途中で放棄された、うら寂しい廃ビルの屋上で、
僕はとんでもない光景を目の当たりにしている。

事の発端は、今日の夜、つい1時間30分前に遡る。
半ば強制的に生かされている塾から、
いつものように帰ろうとした矢先、講師の先生に呼ばれて、
「お前の集中力は本当になさすぎて困る」と説教され、
気付けば説教が始まって1時間、誰も塾に残っていないような時間となってしまう、
一人で夜道を歩き出したところ、廃ビルの一角で緑色の閃光が輝くのを発見して、
「どうせもう遅いし」と、興味本位と怖いもの見たさで廃ビルに侵入したのだ。

閃光が見えたあたりまで登ってみると、僕のいた地点がよく見え、
いつもは見ない夜景がちょっと綺麗で感動したのも束の間、
今度は上の階の方で何かが炸裂する音が聞こえたので、
僕は一瞬迷ったものの、屋上まで駆け上がった。

するとどうだろう。屋上の扉を開けた僕の目の前で、バチィ！と緑色の閃光が爆発した。

「うわっ！」と、思わず声を上げてしまう。

のけぞって尻餅をついた僕が目を開けると、

「なぜ一般人が！？」

「おいおい、獲物が増えたぞ。」

と、二人の人物がこちらを見ていた。
一人は、先端が緑色の炎のようなものが点いている長い棒を持った黒いローブの人。
一人は、両手の平から黒くてゆらゆらしたものを浮かばせた黒いタンクトップの人。

直感的に、これはマズイと思った。
明らかに、関係のない高校生が首を突っ込んでいい状況ではない。
なんなら、命の危険まで感じる。
僕の親友の言葉を借りるなら、「超絶ヤバイ」という状況である。

「君！危ないから離れてろ！」と言いながら、黒いローブの人が、タンクトップの人に緑色の閃光を飛ばした。

「けっ、当たるかよ！」それなりに、というか、僕では到底かわせないような速さで飛来したそれをなんなくかわしたタンクトップの人は、獰猛そうに歯を見せて右手、左手、とテンポよくゆらゆらした黒いものを飛ばした。

片方は、ローブの人に。

そしてもうひとつは、僕に。

「うおあああああ！！！」僕はやっぱりそれなりの速さで飛んできたそれが、本能的に当たってはいけないものと感じて叫びながら姿勢を下げた。

瞬間、僕の頭の上をズズズと音を出しながら通過していったそれが、屋上へとつながる扉のあった場所へとぶつかるが早い、その大きさが何倍にもなり、黒い球体となって消えた。

黒い球体が触れていたと思われる壁は、跡形もなく消え去っていた。

ヤバイヤバイヤバイヤバイ。超絶ヤバイ。

頭の中はそれだけでいっぱいになり、体中から汗が吹き出す。

これは現実なんだろうか、と疑いたくなるほどの光景と体験。

しかし、さきほど尻餅を付いた尻はじんじんと痛むので、情けなくなりながらも、これが現実だということ突きつけられる。

「ちっ、避けたか。」みたところターゲットでもねーし放置だ！とつぶやきながら、タンクトップの人はローブの人にダッシュして近づこうとする。

「クッ！」とローブの人は声を上げ、棒を構えた。

「くらいやがれ！」距離が縮まったところでタンクトップの人は、ゆらゆらを両手から同時に発射した。

「甘いな！」と、ローブの人の持った棒から、今度はオレンジ色の炎を吹き出す。

ゆらゆらは炎に当たると、肥大化して直径1m程になると、消滅。

しかし、噴出される炎はとどまりを知らず、さらに追撃しようと突っ込んだタンクトップの人を飲み込んだ。

「ぐああああ！」と、炎から逃げるように横転したタンクトップの人は、タンクトップは少し焦げているようだが、大きな怪我は見えない。

「熱には強いようだな！」未だ地面を転がっているタンクトップの人に、ローブの人は追撃、とばかりに白い煙のようなものを棒から噴出させた。

「うっ！」と、短くうめいたタンクトップの人は、なんとか逃げようと無理やり体を起こしてバックステップ。

しかしそれでも迫る煙に追いつかれ、「うおおおおおおおおおおお！！」と叫び声を上げた。

僕からは煙に包まれて状況がよく判断できない。

しかし、ローブの人は「甘かったな。」と捨て台詞のようなことをつぶやいていたことから察するに、

決着がついたのだろう。

目の前で起こった信じられないことに、僕はどうすればいいかも分からず、尻餅を着いたその場所から一步も動けずにいた。

そしてそんな僕に近づいてくるローブの人。体格から察すると男か。

男が僕の前に立つと同時に、タンクトップの人を包んでいた煙が完全に消えたらしく、シュワッという短い音がした。

男から一瞬視線を外してそちらを見ると、見事氷の彫像が完成していた。

あ、これ死にますわ。と、そう思った瞬間、僕の意識は途絶えた。